

Thoreau と 現 代

中 田 裕 二

I

Henry David Thoreau¹⁾ (1817—1862) の百年記念集会在が1962年5月5日と6日の両日 New York の Piermont Morgan Library, The Community Church および New York 大学の Hall of Fame で盛大に開催されて以来²⁾, すでに10年以上の歳月が流れた。その後, 1967年7月12日には Thoreau 生誕150年を記念して5セント切手が発行され, Concord の The First Parish Church 前の広場で記念式典が行われたが³⁾, これは ... he [Thoreau] looms up bigger and bigger...: every year has added to his fame. ...⁴⁾ と Whitman が1888年12月24日の日記に記した通り Thoreau の名声が年々上っているという事実を米国政府が承認したものであると考えてよいであろう。

1970年代に入ってから Thoreau に対する関心は高まる一方であり, 70

- 1) Thoreauが名を David Henryから Henry David に変えた事情については Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau* (New York: Alfred, A. Knopf 1965), p. 54を参照。
- 2) 記念集会のプログラム, 展示物, およびこの日に関する新聞記事などについては徳座晃子「日本に於けるヘンリー・D・ソーラー書誌(一)」『東京経済大学人文自然科学論集』第32号(1972年12月) pp. 133—202 を参照。なお, 記念講演は Walter Harding, ed. *The Thoreau Centennial* (Albany: State Univ. of New York, 1964) に集録されている。
- 3) その後発行されたアメリカ作家の切手の中には1971年8月の Emily Dickinson, 73年9月の Willa Cather, 74年3月の Robert Frost などがあり, それぞれゆかりの地, Amherst, Red Cloud, Derry で記念式典が行われた。
- 4) Quoted in Saul K. Padover, *The Genius of America* (New York: Pyramid Books, 1962), p. 217.

年4月には彼を主人公にする劇 *The Night Thoreau Spent in Jail* が初演されたが、後述するように各地で大当たりしロングランを続けた。71年には学界が待望久しい新しい Thoreau 全集の出版が Princeton 大学によって始められ、彼が残した膨大な量の原稿の未発表の分も近い将来刊行されることが期待されている。

このような Thoreau への関心の高まりを証明するものの一つとして、有名な英語の引用句辞典である *Bartlett's Familiar Quotations* の最近の20年間に出版された二つの版における Thoreau の作品からの引用文の数や出所などを比較検討してみよう。1955年発行の第13版 (Centennial edition) と1968年に全面的に増補改訂された第14版を比べると次のような大幅な増加が見られるのである。

本文の1070ページから1105ページへと35ページ増に対し Thoreau からの引用は第13版の pp.588b—590b の約2ページ半から第14版の pp.680b—684a の約4ページへと倍増している⁵⁾。これに対し Emerson からの引用は8ページから8ページ半とわずか半ページ増加しただけである⁶⁾。

上の事実からも容易に理解できるように Thoreau は米国が生んだ真に偉大な思想家、随筆家の一人として今や揺るぎなき地位を確立したのであるが、彼に対する評価は在世中は決して高いものではなく、死後30年を経てやっと彼の真価が認められるに到ったのである。本稿は Thoreau 評価の跡づけを目的としたものではないので詳述は避けるが Wendell Glick 編 *The Recognition of Henry David Thoreau: Selected Criticism Since 1848* (Ann

5) 引用数の大幅な増加が見られる作品は下の通りである。

	第13版	第14版
<i>A Week on the Concord and Merrimack Rivers</i>	1	11
<i>Walden</i>	38	51
"Civil Disobedience"	1	8
"A Plea for Captain John Brown"	0	6

6) 同時代の他の作家たちの中で、Hawthorne と Whitman からの引用数は両版を通じて大きな変化は見られないが、Melville と Dickinson はそれぞれ約一倍半増加している。

Arbor: University of Michigan Press, 1969) の各章の見出しは

Ad Hominem ; Emersonian Eccentric and Naturalist ; 1848—90

First Revaluation : 1890—1916

The Rise to Fame : 1917—41

Mid-Century Insights and Appraisals : 1941 to the Present となっている。そして Glick 教授はそれぞれの時代の 代表的な評論を、冒頭の章は 19篇、他の章は各々 9 篇ずつ選んで掲載しているので Thoreau 評価の変遷に関心を寄せる者にとってこの本は不可欠といわねばならない。

さて、本稿の初めて Thoreau を主人公にした劇がアメリカ各地で大ヒットしたと書いたが、日本ではあまり知られていないと思うのでこの機会に紹介しておく。*Inherit the Wind* (1955), *Only in America* (1960) その他数々の劇の合作者である Jerome Lawrence と Robert Lee が書いた *The Night Thoreau Spent in Jail* は1970年4月21日、Ohio 州 Columbus の Ohio 州立大学で初演されたが、その後一年半の間に 141もの異なった劇団が2000回以上も公演し、アメリカ演劇史上空前の記録を樹立した。これは Broadway だけで上演すると5年続くロングランに匹敵するのである。Chicagoの Goodman Theatre では45年前に開場して以来この劇が最もヒットしたものであり、San Diego の Old Globe Theatre では Shakespeare 以外の劇でやはり最も⁸⁾ 当った出し物である。他の都市の有名劇場でも同様な観客動員が行われたことは容易に想像できるであろう。

題名から察することができるように、この劇は Thoreau が人頭税の支払いを拒否したために投獄された事件を climax にしてはいるが、兄 John と二人で経営していた学校、Ellen Sewell との実らざる恋愛、Emerson や彼の妻 Lydian との関係、その他の episodes が実に興味深く描かれており、

7) New York の Hill & Wang 社から出版されている (1970)。

8) “The Night Thoreau Spent in Jail,” *The Thoreau Society Bulletin*, No. 118 (Winter, 1972), p.8. 筆者も1971年2月 Goodman Theatre でこの劇を見たが、そのときの感激は忘れがたい。

観客に生き生きとした Thoreau 像——作者の表現を借りれば The Now Thoreau⁹⁾——を提供しているのである。前書きの冒頭の文章 The man imprisoned in our play belongs more to the 1970's than to the age in which he lived. は Martin Luther King, Jr. 師が1962年9月 Georgia 州 Albany の獄中から Thoreau との出会いと 公民権運動について書き取らせた珠玉の如き名文 “A Legacy of Creative Protest” 中の It goes without saying that the teachings of Thoreau are alive today, indeed, they are more alive today than ever before.¹⁰⁾ という賛辞を想起させるのである。

では、Thoreau の現代性はどこに見出されるのであろうか。自然環境を破壊しながら発展して行く文明の中で人はいかに生きるべきか、および、個人の権利を侵害しつつますます強力になって行く国家に対する抵抗運動の方法はいかにあるべきかの二つを現代人に示唆している点にあると考えられるのである。換言すれば Thoreau が 100 年以上も前に書いた文章は現代人にも、いや King 師のことば通り、現代に生きるわれわれの心により力強く訴えてくるのである。

II

Thoreau の代表作 *Walden* (1854) ほど異なった種類の背景を持った読者によって愛読される本は少いであろう。この事実は米国 Thoreau Society の会員の職業構成から見ても明らかである。¹¹⁾ 同会の Secretary であり Thoreau

9) Lawrence and Lee, vii. この劇の前書きに付けられた表題。

10) Martin Luther King, Jr., “A Legacy of Creative Protest” in *Thoreau in Our Season*, ed. John H. Hicks (Amherst: Univ. of Massachusetts Press, 1962), p.13. なお全文は48)を参照。

11) Harding 教授は “It is the only literary society I know of where the professional teachers of literature are vastly outnumbered by the non-professionals.” と述べ、続いて毎年7月 Concord で開かれる例会に欠かさず顔を見せる会員たちの職業を、20ばかり列挙し “... the list could go on almost infinitely” と結んでいる。Walter Harding, “Five Ways of Looking at *Walden*,” in *Thoreau in Our Season*, p.44.

研究の世界的権威 Walter Harding 教授によれば *Walden* は主に 5 つの理由のために読まれるのである。¹²⁾ それらを列挙すると、(1)自然誌、(2)簡易生活のための手引き、(3)現代的な生き方に対する諷刺をこめた批判、(4)純文学、(5)精神生活のための聖典なのである。すなわち *Walden* も多くのすぐれた文学作品同様、種々の読み方が可能であり上の 5 つ以外の読み方もあることは言うまでもない。本稿において取り上げる面は主として(3)であるが、現代の複雑化した生活に対して解毒剤ともなるべき(2)と(5)は“plain living and high thinking” というように関連させて考えられるためこれらの面にも多少はふれることになるであろう。

米国の評論家 E. B. White (1899—) は 30 年も前に〔*Walden*〕 is a document of increasing pertinence; each year it seems to gain a little headway, as the world loses ground.¹³⁾ と書いた。また、ごく新しいところでは 1974 年 10 月 31 日付の *New York Times* に “Thoreau’s Old News” と題して現代の若者たちと Thoreau とのかかわり合いについて書かれた記事がある。その中で ... his〔Thoreau’s〕 name still bears the magic and fire for the young that few other literary names——Camus, Orwell, D.H. Lawrence, Hesse, among them——¹⁴⁾ are able to produce. という文が見られる。社会批評家として当時の人びとの生き方に向けられた Thoreau の極めて激しい批判や警告は、この 100 年間に文明がもたらしたより大きな恩恵や禍害の中で生きているわれわれ現代人に対し、より痛烈な力をもって語りかけるからである。また、シラケ世代といわれる現代の若者たちにとって

12) Harding, pp.44—57.

13) E. B. White, *One Man’s Meat* (1944) quoted in *The Annotated Walden*, ed. Philip Van Doren Stern (New York: Clarkson N. Potter, 1970) p. 12. *The Annotated Walden* は *Walden* の初版 (1854)、および *A Yankee in Canada* (1866) 所載の “Civil Disobedience” を複製し、詳細な注釈や年表を付し、多数の写真や図版を加えて発行された大型の書物であり、Thoreau の研究者や愛読者には a must book といえるであろう。

14) Michael C. O’Neill, “Thoreau’s Old News”, *New York Times*, 31 Oct. 1974, p.41.

Thoreau のような 個人主義的生き方は強い魅力を持っているからでもある。

Thoreau は Walden Pond のほとりに自分で小屋を建てその中で1845年 7月4日から2年2ヶ月と2日間いわゆる簡易生活を送ったのであるが、彼の目的は *Walden* の第2章 Where I Lived and What I Lived for の中ほどに

I went to the woods because I wished to live deliberately, to front *only the essential facts of life*, and see if I could not learn what it had to teach, and not, when I came to die, discover that I had not lived. *I did not wish to live what was not life*, living is so dear; ...¹⁵⁾

とあるように明かである。人間は生命を維持して行くためには必需品 (the necessities of life)¹⁶⁾ である衣食住および燃料 (Food, Shelter, Clothing and Fuel)¹⁷⁾ を確保しなければならないのは当然であるが、世間の人びとはこれらの物を手に入れたあと、人生に向って冒険する (to adventure on life)¹⁸⁾ のではなく、より多くの、そしてより高価な衣食住と燃料、および贅沢品や生活を快的にする物を求めて働いているのである。ところが Thoreau によれば

Most of the luxuries, and many of the so-called comforts of life, are not only indispensable, but positive hindrances to the elevation of mankind.¹⁹⁾

なのであり、生命の維持に必要な物でさえも充実した人生を生きるための手段に過ぎないにもかかわらず、それらを獲得することが今や人生の目的と化してしまったのである。一言で言えば人間は自分の道具の道具になってしまったのである (... men have become the tools of their tools.)²⁰⁾

15) Henry D. Thoreau, *Walden*, ed. J. Lyndon Shanley (Princeton: Princeton Univ. Press, 1971), p.90.

16) *Ibid.*, p.12.

17) *Ibid.*,

18) *Ibid.*, p.15.

19) *Ibid.*, p.14.

20) *Ibid.*, p.37.

5年以上にわたって1年間に約6週間だけ自らの手による労働に従事し、冬と夏のほとんどを勉学で過ごした²¹⁾ Thoreau から見れば、世間の人びとは生計を得ることと生きることを混同し、世間体のためになしですませることのできる物を次から次へと買いこんで生活を複雑化しているのである。これらの人びとに対して彼は

... Our life is frittered away by detail Simplicity, simplicity, simplicity! I say, let your affairs be as two or three, and not a hundred or a thousand; instead of a million count half-a-dozen, and keep your accounts on your thumb-nail Simplify, simplify. Instead of three meals a day, if it be necessary eat but one; instead of a hundred dishes, five;²²⁾ and reduce other things in proportion.

と忠告するのである。

彼は、また、生活を単純化し賢明に生きるならば、この地上で暮して行くことは苦勞でなく楽しみである (not a hardship, but a pastime)²³⁾ と確信し It is not necessary that a man should earn his living by the sweat of his brow, unless he sweats easier than I do.²⁴⁾ と皮肉り、また Why should we live with such hurry and waste of life?²⁵⁾ と問いかけるのであるが、この問いは彼と同時代の人びとに対してよりはむしろ現代人に対して発せられていると考えたいほどである。この問いの直後に彼は As for *work*, we haven't any of any consequence. We have the Saint Vitus' dance, and cannot possibly keep our heads still.²⁶⁾ とまで極言するのである。

また、Thoreau の短い essays の中で彼の思想の大部分が入っているもの

21) *Ibid.*, p.69.

22) *Ibid.*, p.91—92.

23) *Ibid.*, p.70.

24) *Ibid.*, p.71.

25) *Ibid.*, p.93.

26) *Ibid.*, (Italics in the original)

として重要な “Life Without Principle” の冒頭で彼は

Let us consider the way in which we spend our lives.

This world is a place of business. What an infinite bustle. . . . It would be glorious to see mankind at leisure for once. *It is nothing but work, work, work*. . . . I think that there is nothing, not even crime, more opposed to poetry, to philosophy, ay, to life itself than this incessant business.²⁷⁾

と言っているが、現代の workaholic²⁸⁾（働き中毒患者）にとってまさに耳の痛い話であろう。

人びとは低賃金のため、luxuries や comforts を求めるため、leisure をもてあますためなど種々の理由のために workaholic になるし、またならざるを得ない面もあろうが simplicity に徹底した Thoreau には²⁶⁾に引用したように「舞踏病にかかって頭を静かにしておくことができない」からとしか見えないのである。もっとも彼は *Walden* の中では働きすぎを全面的に非難はしていない。条件付きではあるが次のように承認さえもしていることは見落とされがちな事実である。

... Some are “industrious,” and appear to love labour for its own sake, or perhaps because it keeps them out of worse mischief ; to such I have at present nothing to say. Those who would not know what to do with more leisure than they now enjoy, I might advise to work twice as hard as they do,— work till they pay for themselves, and get their free papers.²⁹⁾

しかし一般的に言って、人びとは働きすぎ、生活を複雑化することによっ

27) Thoreau, *Reform Papers*, ed. W. Glick (Princeton: Princeton Univ. Press, 1973), p.156. (Italics added)

28) Clarence L. Barnhart, et al., *A Dictionary of New English 1963-1972* (London: Longman, 1973) p.505 に “a person having an uncontrollable need to work incessantly” と定義されている。

29) Thoreau, *Walden*, p.70.

てそれだけ多くの物やサービスを生産するが、他方、自然資源の浪費や枯渇そして環境破壊へと導くものである。石油危機以前の浪費を美德とする使い捨て経済の時代を思い起こせばよい。アメリカは現在30年代以来の不景気に見舞われているが、さきに挙げた *Walden* の読まれる理由の(2)簡易生活のための手引き (a do-it-yourself guide to the simple life)³⁰⁾ としてというのがあることに注目したい。Harding 教授は20世紀になって Thoreau に対する関心の真の高まりが見られたのは、まさに30年代であったことはまことに意義深く思うと述べ、続いて彼の友人が当時彼に “You know, Thoreau is the only author you can read without a nickel in your pocket and not be insulted.”³¹⁾ と言ったと記している。

III

“Walking” という essay の中で

I think that I cannot preserve my health and spirits unless I spend four hours a day at least—and it is commonly more than that—sauntering through the woods and over the hills and fields, absolutely free from all worldly engagements.³²⁾

と書いた Thoreau は彼の一生の大半を文字通り自然の中で過したのであった。生前に出版された名著 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849), *Walden* (1854), *Excursions* (1863), *The Maine Woods* (1864), *Cape Cod* (1865), などの旅行記や、Harvard 卒業後約 2 ケ月の1837年10月22日から死の前年1861年11月3日まで書き続けた日記の中で、われわれは自然の観察、研究および観照の記録がかなりの部分を占めていることを見出すのである。*Walden* も出版当時は自然誌と見なされ、現在でも多くの人びとかが

30) Harding, p.46

31) *Ibid.*,

32) Thoreau, *The Writings of Henry David Thoreau*, V. (1906; rpt. New York: AMS Press, 1968) p.207.

そのように考えていることは Harding 教授の 5 つの読み方の(1)の項の解説通りである。³³⁾

“Economy,” “Where I Lived and What I Lived for,” “Reading,” “Conclusion” などの章と共に(5)の精神生活のための聖典 (a bible—a guidebook to the higher life)³⁴⁾ としての *Walden* への approach には必読の章である “Higher Laws” の初めに次のような注目すべき発言が見られる。

... I found in myself, and still find, an instinct toward a higher, or, as it is named, spiritual life, as do most men, and another toward a primitive rank and savage one, and I reverence them both. *I love the wild not less than the good.*³⁵⁾

また, Thoreau は “Spring” という章の終りの方で

Our village life would stagnate if it were not for the unexplored forests and meadows which surround it. We need the tonic of wildness.... At the same time that we are earnest to explore and learn all things, we require that all things be mysterious and unexplorable, that land and sea be infinitely wild, unsurveyed, and unfathomed by us because unfathomable. We can never have enough of Nature.³⁶⁾
と書いているが “Walking” の中にある “... in Wildness is the preservation of the World”³⁷⁾ はまさに上文の要約と考えることができる。

San Francisco に本部のある Sierra Club は博物学者 John Muir (1838—1914) が1892年に設立した米国で最も古い歴史を誇る自然保護団体である。アメリカ有数の写真家であり, 同クラブの役員 (1946—71) であった Eliot Porter (1901—) がここから *In Wildness Is the Preservation of the World* (1962) という本を出しているが, Thoreau の日記からの引用が見られるこ

33) Harding, pp.44—46.

34) *Ibid.*, p.55.

35) Thoreau, *Walden*, p.210. (Italics in the original)

36) *Ibid.*, pp.317—318.

37) Thoreau, *The Writings of Henry David Thoreau*, V., p.224

とは表題からも容易に察せられるのである。³⁸⁾ Sierra Club に関する記事が新聞に出たとき Thoreau についてまことに適切な言及がなされていた。日本の新聞紙上に彼が登場することは稀れであるのでここで紹介しておく。

「自然保護運動は保守的なものではない。革新的な運動なのだ。なぜなら開発が現代の信仰である以上、これに抵抗し、保存を訴えるのは、厳密な意味でラジカルな運動ではないか」としてシエラ・クラブの会報は「コンサベーション革命」を訴える。それは自然の中にとけこんで、丸太小屋で清貧な生活を送りながら市民的不服従を説いた十九世紀のアメリカの思想家、ヘンリー・デビッド・ソローの思想の原点に立ち返ろう、との動きとなってひろが³⁹⁾ってきている。

Encyclopaedia Britannica は1974年その姿を一新したのであるが“Conservation of Natural Resources”の項のⅡ The history of conservation の中で

... Ralph Waldo Emerson and his friend Henry David Thoreau presented strong arguments concerning the importance of the continued survival of wild nature to the psychological well-being of man. Thoreau became one of the first literary advocates of wilderness conservation.⁴⁰⁾

と書き Thoreau の功績を認めているのである。

38) Harding 教授は Donald S. Harrington と Frederick T. McGill, Jr. との“Panel Discussion on Thoreau”の中で“... I've noticed that over and over again the various conservation campaigns today quote Thoreau in their publicity more than any other writer because he is still pertinent there. . . .”と発言している。Walter Harding, et al., ed. *Henry David Thoreau: Studies and Commentaries* (Cranbury, N. J.: Associated University Press, 1972), p.94.

39) 「この地球—国連人間環境会議を前に—」『朝日新聞』, 1972年5月11日 p.4.

40) R [aymond]. F. D [asmann]., “Conservation of Natural Resources, *Encyclopaedia Britannica* (*Macroaedia* 5), p.43.

このように自然保護、環境保全に積極的であった Thoreau の文章が志を同じくする人びとによって愛読されていることは当然である。一例を挙げると、殺虫剤、除草剤、その他の害虫駆除剤の大規模な使用や誤用が自然の均衡に悲惨な結果をひき起こすと *Silent Spring* (1962) で警告した Rachel Carson 女史 (1907—64) の枕頭の本に Thoreau の日記もあったと伝えられている。

... she lived, as always, an ascetic life. She took no interest in radio or television. In the evenings after writing she turned to her favorite books, most of which she kept near her bed—Thoreau's *Journals*, Richard Jeffries' nature essays, Melville,⁴¹⁾...

次に Antoine de Saint-Exupéry の名作 *Le Petit Prince* について一言述べておきたい。おとな (une grande personne) 向けに書かれたこの童話の中心的主題は「心で見なければ物ごとはよく見えない、かんじんなことは目に見えない (on ne voit bien qu' avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux.)」⁴²⁾ ということである。王さま、うぬぼれ男、飲み助、実業屋などもっばら外面的生活を問題にして生きている「おとな」たちは純真さを失わず内面生活を大切にする *Le Petit Prince* から見ればとてもおかしく変に見えるのである。

Walden の “Where I Lived...” の章の終り近くに *Le Petit Prince* の主題をまさに先取りしているとも言える次の文が見られることは、まことに興味深い。

... Children, who play life, discern its true law and relations more clearly than men, who fail to live it worthily, but who think that they are wiser by experience, that is, by failure. . . . I perceive that we inhabitants of New England live this mean life that we do

41) Frank Graham, Jr., *Since Silent Spring* (Boston: Houghton Mifflin Co., 1970) p.9.

42) Antoine de Saint-Exupéry, *Le Petit Prince* (Paris: Gallimard, 1946), p.72.

because our vision does not penetrate the surface of things. We think that that ⁴³⁾is which *appears* to be.

このように *Le Petit Prince* はどちらかと言えば若い読者たちには取つきにくい印象を与える *Walden* の格好の入門書と考えることができそうである。1974年英国で制作され、現在米国などで好評を博している musical 映画 *The Little Prince* の pilot 役を演じている Richard Kiley は *Walden* を愛読しており、ページが tissue paper のように柔くなるほど何度も読んだと伝えられている。⁴⁴⁾

そして、また Garnett de Bell, ed. *The Environmental Handbook*—Prepared for the First National Environmental Teach-in—(A Ballantine Book/Friends of the Earth Book, 1970) の Bibliography の Ecological Awareness の項目下にこの二冊が相前後して記載されているという事実は両書の親縁関係を裏付ける一つの証明と考えることができるのである。

IV

Walden と並んで、いや、多分 *Walden* よりもしばしば読まれる Thoreau の作品は “Civil Disobedience” である。⁴⁵⁾ これは *The Night Thoreau Spent in Jail* の紹介の際に述べたように *Walden* 滞在中1846年7月23日(か、24日)一部がメキシコ戦争に当てられる人頭税の納税拒否をしたため投獄された体験をもとにして、権力(政府など)に対する無抵抗による抵抗の方法を述べた essay である。

“Civil Disobedience” がその後、反権力運動の指導者たちに与えた影響は実に大きいと言わねばならない。Harding 教授は In fact, outside con-

43) Thoreau, *Walden*, p.96. (Italics in the original)

44) “...he [Kiley] admits to reading Thoreau's *Walden* so many times the pages are the consistency of Kleenex.” *Christian Science Monitor*, 22 Jan. 1974,

45) ... It [“Civil Disobedience”] has been widely reprinted and is perhaps more frequently read than any other work by Thoreau. ... Walter Harding, *A Thoreau Handbook* (New York: New York Univ. Press, 1959), pp.51—52.

tinental United States Thoreau is probably more widely known as the author of “Civil Disobedience” than of *Walden*.⁴⁶⁾ と言っているが、以下の事実から考えて首肯せざるを得ないのである。

古いところでは、インドの独立運動に身を献げた Mahatma Gandhi は Thoreau との出会いや彼から受けた影響について Webb Miller に次のように語った。

“Why, of course I read Thoreau. I read *Walden* first in Johannesburg in South Africa in 1906 and his ideas influenced me greatly. I adopted some of them and recommended the study of Thoreau to all my friends who were helping me in the cause of Indian independence. Why, I actually took the name of my movement from Thoreau’s essay, “On the Duty of Civil Disobedience,” written about eighty years ago. Until I read that essay I never found a suitable English translation for my Indian word, *Satyagraha*. . . . There is no doubt that Thoreau’s ideas greatly influenced my movement in India.”⁴⁷⁾

第二次大戦中ナチドイツによって大規模なユダヤ人迫害が行われたことは記憶に新しいが、デンマークやオランダなどでこれに対し非ヤダヤ民族の市民までが一致協力し、皆がユダヤ人の印である黄色い星を胸につけるという非服従運動を起こしてナチの計画を挫折させることに成功した都市もあったと伝えられている。また、大戦後のアメリカでは、黒人の間に、長期間にわたって白人から受けてきた差別を徹廃させようという気運が高まっていた。1950年代の終り頃から特に Martin Luther King, Jr. 師の指導のもとで行われた反対運動は Thoreau の教えに 忠実に 従ったものであることは、さきに 10) で 引用した同師の ことばの前後に 明確に述べられている通りである。

46) Walter Harding, *A Thoreau Handbook*, p.52.

47) Webb Miller, *I Found No Peace* (New York: Simon and Schuster, 1936), pp. 238—39.

少し長いが紹介する価値が充分あると思われるので “A Legacy of Creative Protest” の全文を掲げておく。

During my early college days I read Thoreau's essay on civil disobedience for the first time. Fascinated by the idea of refusing to cooperate with an evil system, I was so deeply moved that I re-read the work several times. I became convinced then that non-cooperation with evil is as much a moral obligation as is cooperation with good. No other person has been more eloquent and passionate in getting this idea across than Henry David Thoreau. As a result of his writings and personal witness we are the heirs of a legacy of creative protest. It goes without saying that the teachings of Thoreau are alive today, indeed, they are more alive today than ever before. Whether expressed in a sit-in at lunch counters, a freedom ride into Mississippi, a peaceful protest in Albany, Georgia, a bus boycott in Montgomery, Alabama, it is an outgrowth of Thoreau's insistence that evil must be resisted and no moral man can⁴⁸⁾ patiently adjust to injustice.

その後、ヴェトナム戦争中の納税拒否、参戦拒否の実践者や支援者たち、最近では、環境保全や消費者運動への積極的な参加者たちも King 師同様、Thoreau が提唱した “Creative Protest” 運動に身を献げている人びとと言えるであろう。

最後に Thoreau に対する誤解を少しでも解いておきたい。東山正芳教授も『ヘンリー・ソーロウの生活と思想』のあとがきで「…ソーロウに対する誤解がひどすぎるのではないかと思う。この誤解は旧世代の人がソーロウの隠者として又人間嫌いの偏屈者としてのイメージをもってしまっていること⁴⁹⁾である」と述べているが、まさに然りである。日本では彼は自分で庵を結んで

48) See 10).

49) 東山正芳『ヘンリー・ソーロウの生活と思想』南雲堂, 1972. p.275.

そこに住みついた世捨て人であると romanticize する人が多いようであり、“Civil Disobedience” の Thoreau は等閑視される傾向が強いのである。このような誤解に対しては彼の Walden での生活は2年2ヶ月2日間行った簡易生活の実験であり、彼自身

I left the woods for as good a reason as I went there. Perhaps it seemed to me that I had several more lives to live, and could not spare any more time for that one.⁵⁰⁾

と書いているという事実を述べれば充分であろう。

次に、しばしば寄せられる疑問に「Thoreau はたしかによいことを言っているが、もし、人が皆彼のような生活を送ったならば、文明生活は成り立たないではないか」というのがある。これには、彼自身、はっきり

... I would not have any one adopt *my* mode of living on any account; for, beside that before he has fairly learned it I may have found out another for myself, I desire that there may be as many different persons in the world as possible; but I would have each one be very careful to find out and pursue his own way, and not his father's or his mother's or his neighbour's instead. The youth may build or plant or sail, only let him not be hindered from doing that which he tells me he would like to do....⁵¹⁾

と言い、また別のところでも、「自分の道を歩め」(Keep on your track...)⁵²⁾と教えている。

もし、Thoreau が現代日本に生きてきて、国鉄の“Discover Japan”のポスターを見れば、“Discover yourself, first”⁵³⁾とつぶやき、ラッシュアワーの電車にもまれ、出世競争に心身をすりへらしているサラリーマンには、

50) Thoreau, *Walden*, p.323.

51) *Ibid.*, p.71. (Italics in the original)

52) *Ibid.*, p.118.

53) Cf“...Explore thyself.” *Ibid.*, p.322.

54) *Ibid.*, p.326.

Why should we be in such desperate haste to succeed, and in such desperate enterprise?⁵⁴⁾...

と警告を発し、遊びや趣味に熱心で勉強の遅れがちな子どもを持ってヤキモキしている教育ママたちには、

...If a man does not keep pace with his companions, perhaps it is because he hears a different drummer. Let him step to the music which he hears, however measured or far away. It is not important that he should mature as soon as an apple-tree or an oak.⁵⁵⁾

と言って、もっと長い目で子どもの成長を見守るようにすすめるであろう。

実際、Thoreau への関心は「モーレツ」から「ビューティフル」へ、そして「simple」あるいは「primitive」へという社会的関心の動きにしたがって、ますます高まるように思われるのである。Thoreau の教えは、かくして King 師などの述べたようにまさに現代に、いや現代においてこそ生きていられるのである。(May 6, 1975)

55) *Ibid.*,